

吉元 信行 著

## 『アビダルマ思想』

広瀬 智 一

本書は、著者がこれまで学会や学術機関誌等で発表された諸論文および新たに稿を草されたものを一書にまとめ公刊されたものである。

アビダルマ(インド)思想に対する学術的研究は既に東西の諸先学により学的蘊奥を究め尽された感がある。しかし、本書において精細に論究されるアビダルマの新資料 *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvitī* (ADV) の解明は、われわれにもう一度アビダルマ思想の原点を見直すきっかけを与えてくれるものであった。その意味で著者による ADV の研究成果は後学者に大きな学問的関心と啓発を与えるものである。思想が単なる観念や理論と結びつくだけのものではない限り、アビダルマ思想によって、ある特殊理論の壁を克服した時代を越えて自己の学問の道や立脚点が開発されるかもしれないのである。

佐々木現順博士は本書の「序言」で「該書の本領は、斯界に於て新しく登場した梵本 *Abhidharmadīpa* と其の *Vibhāṣā-*

*prabhāvitī* を用い、又、関連の諸論書を、梵・漢・巴・藏の原典資料を駆使することによって、単なる理論を *factual* に跡付けたところにある」(頁)と推薦せられたように、著者の原典資料に即した鋭い洞察力と方法論によって新領域を開拓されたことに限りない喜びを感じるものである。

著者は「あとがき」で「アビダルマ(阿毘達磨)思想」とは何かを簡潔明瞭に述べる―「原始佛教の思想を基礎にして、それに哲学的方法論を加え、その真理の普遍性を一大体系化したところの佛教哲学であった。原始佛教の思想は佛陀の対機説法を基にして形成されたものである。凡愚に対する佛陀の説法は、極めて理解し易い方法で為されたが、佛陀自身が全身全霊を打ち込んで求めた真理そのものは、決して容易に理解しうるものではなかった。対機説法の根底に光っていたこのような真理の普遍性を追求して発達した佛教の思想、それこそがアビダルマ思想と言われるものである。」(三七九頁)。本書の論究の基本的姿勢と方法論が適確に表明されていることを知る。次いで著者は本書の方法論を三編に分類して論旨を述べている(三八二頁)が、それは以下の目次構成にそった内容の概観と紹介によって確かめられると思う。

### 二

第一編「説一切有部思想の展開」第二章「説一切有部の思想的系譜」第一節「アビダルマの語義」において、説一切有部(『有部』)の基本概念であるアビダルマの意味、有部の初期諸

論書から『俱舍論』乃至『順正理論』のアビダルマの伝統的、語源的解釈を論述する。

第二節「アビダルマ思想の成立」では、南北諸論書の比較検討を通してアビダルマの起源とその原初形態、佛説としてのアビダルマの教法的位置づけや正統有部における *sūtra* と *abhidharma* との内在的關係についての解釈をめぐって新資料 ADV により伝統的アビダルマ観の立場を確立する。

第三節「部派佛教の成立と展開」では、根本分裂、枝末分裂の佛教界から部派の成立の根拠と展開の跡付けを諸先学の論考をふまえ述べる。

第四節「説一切有部の成立」では、アショカ王の伝道使派遣が部派成立の機会になったこと、有部の名称の成立、世親・衆賢以後の論書 ADV について注目され検討する。

第二章「説一切有部の思想的展開——『アビダルマディーパ』の思想的位置——」第一節『俱舍論』と『順正理論』のもとで、佛教学史上において果たした『俱舍論』の役割および俱舍論主世親と大乘思想との関連を分析して新たな方法論を駆使し『俱舍論』にない有部の哲学を成立せしめた根拠を『順正理論』に見出し披瀝する。

第二節『アビダルマディーパ』概観』では、正統有部の梵文新資料 ADV の原典解明と資料的価値について論究する。

ADV の写本は一九三六年、ラーフラ・サンクリトヤーヤナによってチャット・シャル (Shah) 寺で発見された。一九五九年、P. S. シャイニ博士が Tibetan Sanskrit Works Series

Vol. IV として Patna の Kashi Prasad Jayaswal Research

Institute より校訂出版、更に梵文原典の補正をおこない新製本改訂第二版として一九七七年に出版した。藏・漢訳はなく推定約一六〇葉あるうち現存するのは六三葉だけ、散佚部分の多い未完本である。シャイニ博士は造論者を『大唐西域記』の故事をもとに衆賢の直弟子毗末羅密多羅 (Vimalamitra、唐、無垢友 450-550 A. D.) と推定するが結論を得ない。ADV の構成は『俱舍論』の前八章に対応する。逐一的偈頌 (Kāṭika) の一致は見られず ADV 独自の偈頌をつくる点で『順正理論』の構成とも異なる。尚、筆者は ADV の、全体を八篇 (adhyaaya) に配列し各一篇を四章 (pada) 単位に分けて註釈するという科文の構成の特色について注目したい。次いで ADV の思想的特色について、特にその批判的形態が世親や部派間の異説を論難するのみならず大乘の学派思想、更には外教をも広く批判の対象としていることを論究される。

第三節『アビダルマディーパ』と諸経論との関係』では、ADV の所在を解明するためにまず有部系諸論書における極微俱生説の比較検討がなされる。そこでも大乘系論書からの論難を意識下において ADV 独自の説を打ち立てたことが究明されることが検証される。次いで ADV 所引の『法句経』四例について検討される。最近公刊された新資料『混淆梵語法句経』 (Buddhist Hybrid Dharmapada) をも精査し ADV が『法句経』の源泉系統の解明のための貴重な資料ともなることを論述する。

第四節『アビダルマデーパ』の作者とその学系』では、『西域記』中、伊濕伐邏 (Isvara) 論師述作の『阿毘達磨明灯論』の論名に注目される。漢訳語「明灯」は『入阿毘達磨論』の *sgrom ma (dipa)* と相対し *dipa* か *pradipa* いずれにも還元可能である。又、徳光 (Gunaprabha) の故事をもとに彼の著作『弁真論』(梵名 *Tattvasastryasāstra*, *Tattvasandeshasāstra*) と *ADV* の *Dipakāra* 作『*Tattvasaptati*』との関連性を指摘されるが確証はなし。学系を「学派の系統」と解すれば、正統派の論師世友 (*Vasumitra*) の流れをくむ有部の学系である。又、成立年代の考証では、その他に文法的論議による論証が散見されること、外教では『*Yogabhasya*』(A. D. 500 頃)系のものに言及する等から一応 A. D. 550-600 年間に想定するがそれ以後の可能性もあり得るとし今後の討究が期される。

第三章「説一切有部における批判的立場」第一節「説一切有部による他部派批判」では、部派の代表的学派有部の判釈の立場と形態について論究される。『異部宗輪論』の記述から *ADV* に至る判釈の形態が示される。特に *ADV* の中では、理証教証 (*yukti-agama*) に違反し正統性を保ち得ない三論者(1)分別論者 (*Vibhajyavādin*)・譬喩師 (*Darśanīka*)、(2)ヴァーイトウリカのブヨウガ空性論者 (*Vaitulika Ayogaśūnyatāvādin*)、(3)補特伽羅師の事無記論者 (*Paudgalika Avyaktītavādin*) について詳説する。論者名(2)は *ADV* 特有のもの。 *Vaitulika* の名称は五ヶ所(九四頁の四ヶ所および註に付加)みられ、その語源的説明を示すが本書二九八頁以下において詳細に論究される。更に、

*Dipakāra* が自派を〈*sad-vādin*〉なりとして有論者＝*眞実論者*と解したのはアビダルマ思想上意味のあることである。

第二節「説一切有部内の異解批判」では、四大論師説を列挙し批評するが、*Dipakāra* が法教 (*Dharmatāta*) に対する衆賢の救釈に従わず否定する点は思想的に必ずしも『*順正理論*』を踏襲していない証拠である。又、*ADV* は『*俱舍論*』の作用 (*kārita*) の代りに *kriyā* の語を用いる。*ADV* が作用概念の理解の仕方に根本的相違を見出したからである。

第四章「説一切有部実在論の基盤―三世実有理―」第一節「説一切有部における実在論の根拠」では、*ADV* の作用 (*kriyā*) 概念がインド宗教哲学思想の重要概念 *sakti* を受けていること。その *kriyā* 概念で一切法は有作用である実在の根拠を確認する。衆賢は世親の曲解を衆賢流の用語で反証し、*ADV* は諸法と三時の関係について同一基体性 (*ekādīkaraṇya*) と離基体性 (*vaiyadhīkaraṇya*) の新用語を用いて実在の意味をそれぞれ確認する。*ADV* のこの文法的論証法は衆賢以後の有部に対する論難を意識してのものであったとみる。

第二節「説一切有部における実在の諸相」では、「有 (*sat*) に「存在」と「眞実」の両義があること。これは「存在」が実在として把握されるのは眞偽、善悪を越えた眞存在を意味するものだからである。この *sakti* の思想を受けた作用 (*kriyā*) のはたらきが根拠となるとする。それは又、二十二根と作用の関係の底流にもなっていると解する。次いで、*ADV* の四種の有 (*sat*) (1)勝義有 (*paramārtha-s*)、(2)世俗有 (*samvrti-s*)、

(3)両有 (ubhayatha-s)。(4)相待有 (apeksya-s) の分類の仕方は ADV 特有のあり方を示すものであるとする。

第三節「アビダルマディーパ」における三世実有の論証」では、まず三世実有の原語〈advatrayam asti〉を検討し、この場合の実有は〈traya-sat〉ではなく〈astī〉であることに注意される。そして三世実有のいくつかの論証をあげて論述する。ADV の三世実有に対する思想的特質は世親と衆賢との対比を通して究められる。特に大乗への転向、者世親に対する ADV の批判的態度は熾烈窮まる。

総じて、ADV の学派的立場は本質的には衆賢の法灯を継ぐ正統有部側に立つとはいえず、ADV の論証の仕方には正系、傍系の他論書にない独自の方法论が駆使されていることが窺い知られるのである。

### III

第二編「アビダルマにおける存在の分析」第一章「物質的基礎概念の分析」第一節「色 (rūpa) の構成と分析」では、極微と四大の両概念はインド思想の自然観より生理学的現象だけでなく心理学的現象を叙述するために受け継がれたものであること、後期アビダルマ論書 (ADV) において極微説は、感性的心理学的物質論である色聚論と融合しアビダルマ独自の物質論を生むに至ったことを八事俱生説で証明する。

第二節「八事俱生説」では、その解釈をめぐって先の極微説が色聚説と関係する論議が生まれ、矛盾点を解決するための論

証が後期有部系の論書において明らかにされてゆく。他の一極微と不相離なる七事との関係において説く ADV の論証の仕方は有部の教学と関係深いジャイナ教の原子論の哲学にも認められるという。O・ローゼンベルグの解釈が有効的に把握される。

第三節「説一切有部における物質論の特質」では、「佛教徒は物質の本性 (die materielle Natur) ではなく、人格 (Person-Ichkeit) を分析しており、而も二つの観点即ち生理学か心理学かの立場である」というローゼンベルグの見解はよく有部の物質論の解明に光を与えるもので、無表色の特質、色の分類と分析のもとでもアビダルマの物質論は一貫していることを論述する。

第二章「心理的基礎概念の分析」第一節「心・心所の関係」では、心・心所別体説をとる有部と心・心所無別体説をとる経部世親との重要な論争点になる心・心所の俱生関係について検討する。ADV は基本的には衆賢の説に従いながら大種と所造色を自体 (svarūpa) と為作されたもの (akṛta) の両概念を介して積極的かつ独自の心・心所別体説を展開する。ADV 中の『法句経』三七偈の意趣も心所肯定を明示する教証であると理解される。

第二節「心所の分類」では、特に学派上密接な関係を有する有部と瑜伽唯識学派との心所論の力点の相違について吟味する。

第三節「心の構造」では、経部・瑜伽唯識学派のアーラヤ識 (種子 (bīj)) 説と有部の反論の根拠、五義の平等、心・心所俱生に基づく心理的存在の把握が確認される。

第四節「アビダルマディーバ」における心所法の意義」では、関係部分の抄訳を示し参考を供す。

第三章「非物質的・非心理的基礎概念の分析」第一節「心不相応行法」では、この法の立て方の異説をめぐって南北両伝の学派学説の諸相を比較検討する。有部の実有的心の分析に単なる心理論から認識論的・解脱救済論の道へ通ずる存在意義をみとり得る。

第二節「無為法」では、無為仮実の学派的論争をもとに択滅、非択滅についての有部の正義を明かす。次いで、

第三節「滅諦・涅槃の大乗アビダルマ的分析」では、無著の『集論』のなかに新たな大乗アビダルマ思想の特質を見出し滅諦に関する十二の各観点を語源的解釈を通して解析する。

#### 四

第三編「説一切有部による大乘批判」第一章「アビダルマディーバ」に見られる大乘佛教徒への呼称」第一節「ヴァーイトゥリカ」なる呼称」について、いわゆる小乘側の諸論書に大乘思想に関する言及が殆ど欠いているなかで、新資料 ADV に登場する Vaitulika に注目され詳述する。辞書、諸経論類に未見の Vaitulika の語義についてジャイニ博士、A・K・ワダー博士の所説に加えて K・R・ノーマン博士の当該論文を紹介し検討する。W・ラーフラ博士の所説に疑義を呈したノーマン博士は語源にはブラークリットからの逆成語 (backformation) であることを証明しようとする。しかし本書は『集論』『釈論』

に示される大乘菩薩蔵の三異名 vaipulya, vaitulya, vaidalya に関する語源的転釈を通して Vaitulika を外道の次元まで引き戻し「等しからざる異教徒」という辛辣な蔑称語であるとみる。

第二節「アマーガ空性論者」なる名称」では、更に ADV の別の新用語 Ayogaśūnyatāvādin に注目される。ADV の世親批判の形態から瑜伽唯識学派の三自性 (trayaḥ svabhāvaḥ) 説批判へ至る展開の意図を検討する。次いで〈ajoga〉の意味について、所説と原典に即した解釈を示す。

第二章「説一切有部における『空』の位置づけ」第一節「瑜伽唯識学派における空と空性」では、ayogaśūnyata の語義およびその意趣を感得した上で、世親の空性観について『中辺分別論』(Madhyanta-vibhaga-sāstra) の空性 (śūnyatā) の考え方の思想的背景を考える。

第二節「説一切有部における空の概念」では、まず四念住の総相・別相の二念住について ADV の論証の仕方に注目される。ADV (Ka. 389) 以下で諸法と無我の関係、諸行と自性の不空の関係論し、空の理解の仕方に一定の論証方式が存することを知らる。ここに空Ⅱ非有と不空Ⅱ実有との極端な二等方式を排した中道 (madhyana pratipat) の教えが意味をもつ。又、引証する『法句経』中に空に関する言及がないことに注目され、有部の空把握の傍証になるとみる。

第三章「無自性論批判」第一節「中観学派の無自性論」では、『廻諍論』『中論』をよび月称註『Prasamapada』をよびに検討する。

第二節「瑜伽唯識学派の無自性論」では、同学派は専ら有部と中観学派から学影響を受けるが、三自性と人間存在のかわり方に解脱実践という力動的心の転換(転依、parāvṛttāśraya)の原点を感得する。

第三節「過未無体論批判」について、ADVは現実生成の力動性をもつ法の自性(svabhāva)を立て経部の批判に答える。又、経部の「滅するに因を待たない」(nirhetuka-viṇasa)に対して有部は必ず「滅するに因あり」(saheturviṇasa)と立て反論し「滅」(viṇasa)の意味を karitra ㊺ kriyā の区別を通して論証する。

第四節「無自性論と自性」では、Vaiṭhika の縁起無自性空の主張は中観の根本思想であると同時に無著の『集論』法品『解深密経』無自性品第五の所説とも相応する。Dīpakara はこれをブラフマ問答(ヴェーダの謎かけ問答、brahmodya)に等しい虚構的観念の遊戯にすぎないとして新たに法と因と縁の関係を譬喩的表現を用いて批判する。又、経部の因縁和合と極微和合に關する仮実の論議や過未仮有論の所在を検討する。次いで、大徳クマラーラタ(Kumarata)の三世觀の例喩に一定の評価を与えていることに注意される。又、ADVは dravya, svabhāva, svarūpa, kārita, kriyā 等の有部的概念の区別を通して経部世親の概念的混乱と曲解を批判する。筆者はアビダルマの svabhāva の本質概念について、ウパニシャッド哲学などの視座からも見直し検討さるべきではないかと思う。最後に中観学派の無自性空論に対する有部の批判的意義について

論究される。縁起を認め事物の相関関係を両学派とも認めながら互いに分離対立の平行線を辿るのは自性(svabhāva)の理解の仕方に大きな隔りが存するからであつたとみる。新資料ADVはよくその論調を明示しているときされる。アビダルマ思想の映像を解明する鍵もこの辺にあるのであろう。

以上、本書目次に従い著者の言を借りながら、又若干の私的感想をまじえ内容を概観しまとめ紹介してきた。従来アビダルマ研究に対しなれば等閑に付されてきた重要で多様な諸問題が著者の該博な思考と方法論によって補訂をみ、総合的に整理し解明されていることを本書において学び得た。特にアビダルマ文献の新資料ADVの精細な原典解明は今後のアビダルマ思想の研究に対して新機軸を提供するものであろう。この意味で本書はアビダルマを学ぶ後学者にとって極めて有益な学術研究書であるのみならず大きなひとつの基本的指針を与えてくれるものである。尚、一言添えるならば、若干の内容の重複部分を補うに諸論文の初出一覧の補註が便利であろう。しかしこれによって本書の学術的評価は聊も損なうものでないことは言うまでもない。

最後に、ひとり筆者による本書解読の不当不備や遺漏ありしは謝して正してゆくのみである。

(昭和五十七年三月 法蔵館 A5判 三三三頁 索引一四頁  
英文目次八頁 九、八〇〇頁)